

## 【目 次】

- 1 発端 002
- 2 交渉 022
- 3 本番 037
- 幕間—— 069
- 4 第二回 077
- 5 来客 129
- 6 晚餐 140
- 7 第三回 158

※この作品はフィクションです。

実在の人物や団体などとは関係ありません。

「あのクズめ！」

聖騎士ヴェルナーは届いたばかりの書類を今すぐ破り捨てたくなった。そこには整然と数字が並んでいる。

今年の聖騎士団に与えられる年間予算だが、昨年より一桁も少ない。

これでは魔物討伐の遠征費用も武具の修繕費用もまかなえない。

今いる騎士たちの給料を払えばおしまいだ。爵位持ちのヴェルナーには両親から受け継いだ領地の税金があるが、団員の多くは次男や三男坊だ。

彼らにとって騎士団から出る給金だけが命綱だ。

(それもこれも奴のせいだ……!! 忌々しい)

財務評議会議長——オブライエン。

今年、法王庁の財務を一手に引き受ける地位に就任した男であり、ヴェルナーにとってははかつて妻を手に入れるために争った恋敵だ。

最終的に妻の心を射止めたのはヴェルナーだったが禍根が残った。それをまさかこんな形で返してくるとは。

聖職者の風上にも置けない。

(そもそもこんなやり口をなぜ法王<sup>げいか</sup>陛下はお許しになられたのだ?)

あの冷静沈着な御方がこの数字を見逃すとは思えない。

いつそ直訴<sup>じきそ</sup>すべきか?

だがそれは法王庁で最も恥ずべき禁じ手である。

法王を守るべき存在が法王の慈悲を乞う。それは法王が己のそばにい

るものすら救えぬ無能だと宣言するも同じだ。

狎下の権威が失墜しかねない。

それは百年続く聖都の平穩を乱す行為である。

となればヴェルナーの取れる選択肢は限られてくる。

——オブライエンに頭を下げて金を乞う。

いいや絶対<sup>に</sup>だめだ。

そんなことをすれば奴をつけあがらせるだけだ。

——妻の実家を頼る。

最愛の妻カーラは灰の売り買いで財を築いた大商人の一人娘だ。上質

な木材を焼いて作った灰は衣類に色を定着させるための重要な媒なかだちと

なる。美しくきらびやかな法衣の生産で知られる聖都では欠かせない存

在だ。彼女の実家ならこの程度の予算の埋め合わせは造作もないだろう。

だが妻は自分が原因にあると知ったらどう思う？

そして義理の父はこの程度のことでも処理できない義理の息子をどう思うだろうか。

情けない男にひとり娘をやってしまったと失望するに違いない。

そんなのは男として耐えきれない。

それにだ。

この嫌がらせが今年一年で終わるといふ保証はどこにもない。来年、再来年と騎士団長の職を退くまで続けられたら……。

考えただけで背筋がこおる。

（法王庁の手が届かない場所を頼るべきだ……）

しかし聖都でそんな場所が存在するのか。

朝の光が差し込む騎士団長の執務室でヴェルナーは腕を組んで考え込

んだ。

聖騎士団馴染みの鍛冶屋職人や遠征で知り合った冒険者崩れに、今までに捕まえた悪党たち。

そのひとり一人を頭に浮かべ、金の交渉ができそうな人間を思い出していく。

ふと、執務室の窓辺からカラスの鳴き声が響いた。

地獄の使いと称されることがある鳥の姿を見てヴェルナーの脳がひらめいた。

「……………あ」

いた。

この金額をまかなえて、なおかつ法王庁の埒外らちがいに存在する者たち。

聖都で公然と高級娼館を経営し、聖職者の客を多数もっている組織、

通称——父祖の辺獄。

その首魁しゅがいとして君臨する小人族こびとの男パトリック、奴なら交渉のテーブルにつく、はずだ。

本来は聖騎士の取り締まり対象であり、騎士団にとって因縁の相手だが、内々に手打ちで済ませた事件がいくつもある。

（以前の事件を交渉材料に使えばあるいは……）

こんなプライベートの問題に使いたくはないが、このままでは聖都の治安を守る騎士団が弱体化してしまう。それだけは避けたい。

（本当なら私が騎士団長を退いて後任に託すやり方もあるだろうが……）

法王庁内の『政治』をうまく切り抜けられる人材はまだ育っていない。（花より実を取る男だ。今も投獄されている者達の恩赦を持ちかければ

揺さぶれるだろう)

脳裏に以前見た少年の姿が思い浮かぶ。

小人族は成人しても、人間で十二、三歳の少年ぐらいにしか成長しない種族だ。身長は自分の胸までしかない。

あどけない少年にしか見えなかったが、あの容姿に気を許したら最後、骨までしゃぶり尽くされるだろう。

なにせ御年、百三十二歳だ。

獰猛なオオカミを腹に飼っている男だが、彼なりの矜持を持つ男だ。

その部分をおかきつけて一度だけ褒めたことがある。

『君の苛烈さは、私の仕えるお方に似ている』

奴と二人きりの時そう言った。意外だったのか、あるいは法王猊下に暗に似ていると言われて心外だったのか、きよとんとしていた。

(いつもあんな顔をしていれば可愛げがあるものを……)

あれ以来、彼に聖騎士のなかでも面白い人間と思われているらしく、事あるごとに騎士団長なんかやめて仲間にならないか？ と誘われる。まあ一筋縄ではいかない男だが、卑劣なオブライエンに頭を下げるよりは増しだ。

蛇の道は蛇ともいう。

(話してみる価値はある)

もしもダメなら他の手を考えてみるまでだ。

ヴェルナーはしわくちやになつた書類を伸ばして元通りにすると、執務机に置いてある通信用魔道具の受話器を手を取った。

連絡する先は奴が経営する高級娼館のひとつだ。この時間なら奴の懐刀のひとりが集金として店を訪れているだろう。

そこから渡りをつけられる。

好奇心旺盛な奴のことだ。きつと会うと言うに違いない。

法王庁にいる味方よりも敵である奴のほうが信頼できる。

その皮肉にヴェルナーは苦い笑みを浮かべた。



奴の部下を通して指定された時間は夜遅かった。

ヴェルナーは重たい鎧を脱ぎ、聖騎士のトレードマークである純白の騎士服に着替えた。仕事が忙しくて散髪できず、金色の伸びた前髪が目にかかる。

すっかり日の落ちた窓に映る姿は三十路の疲れ切った男の姿だった。

苦勞性の性格が眉間のシワになって表れていた。

(ひどい顔だな。これでは奴に笑われてしまう)

口の端をゆるめると、お堅い表情が少しマシになる。

いつもそんな顔を浮かべていたらいいのに、と妻によく言われるが、騎士団を率いる手前、ゆるみきった顔を浮かべてはいられない。

たまに功を挙げた部下を笑顔でねぎらうと、彼らはめったに見ない騎士団長の笑顔に凍り付く始末だ。

(まあ、嫌われている訳ではないから良しとしよう)

目立つ純白の騎士服を丈の長い黒地のコートで隠すと、足早に目的の場所へ向かった。

着いた先は聖都の繁華街から奥まった通りにある酒場だった。

入口は狭く、照明も薄暗い。

カウンター席が五つ、その隣にテーブル席が三つ。唯一、奥のテーブル席だけが空あいていた。

奴の構成員たちがすでに先客として入っていた。

「法王庁の犬め……っ」

「酒を飲んでる俺らを捕えに来たのか？ イイ子チャン」

彼らの野次に構わずただ一言、給仕に命じた。

「ヴェルナー・デューリンガーが来たとパトリックに伝えろ」

ガタン、と大きな音を立ててカウンターに座っていた男たち一斉に立ち上がった。

彼らにとって敬愛すべき裏社会の顔役を呼び捨てにする人間は、誰であっても制裁の対象だ。

相手をしてもいいが、これから彼と交渉する身だ。喧嘩は避けたい。

(適当にあしらうか……?)

しかしパトリックも人が悪い。

自分が経営する店に呼びつけたのなら、こうなることぐらい分かっていただろうに。それとも今の状況をどこかで見て楽しんでいるのだろうか？

その可能性はありえなくもなかった。

「ここがどこの店か知ってて言ってるのか？」

ドスの効いた声で男たちに取り囲まれる。

ヴェルナーはできる限り穏和な態度で臨んだ。

「君たちと事を構えるつもりはない。今夜は彼と話をしに来ただけだ」  
用があるのはパトリックだけだ。

だが、そのひと言がいけなかった。

言い換えればそれはお前らに用はないと冷たくあしらうも同然だったからだ。

襟を容赦なくつかまれた。

「叔父貴の名前を呼び捨てにする奴ア、聖騎士様でも許されねえんだよ。ためえらに何人つかまったと思つてやがる！ 五年前の件は忘れてねえぞ」

——五年前の事件。

さる高級娼婦が法王庁の上客に葉を売った事がきっかけで、庁内に麻葉がはびこる事態となった。その結果、法王の勅命により騎士団が動き関係者を逮捕、処罰した。

その数や百人は越える。

聖都始まって以来の大事事件に法王庁は大いに揺れ、更迭人事が相次い

だ。そして事件は裏社会で生きる彼らにも大きな影響を及ぼした。

幹部級の投獄である。

この事件により彼らの勢力は大きく縮小され、運営する高級娼館は五つ潰れた。

その恨みたるや尋常ではない。

——しかし組織が残っただけでも増した。

なにせこの件は彼らの首魁パトリックと交渉を重ねた末の結果である。法王庁の体面、彼らのプライド、そして聖都で暮らす人々への心象を一念に分析し、協議を重ねた末に手に入れた落としどころだった。

ここで彼らと言い争うのは本意ではない。

早く終息させなければ。

ヴェルナーは奥に一つだけぼつんと空いたテーブルを睨んだ。

「客を盗み見るのがお前のやり口か？」  
すると奥のテーブル席から透明なベールを剥ぐように、彼が姿を現した。姿隠しのマントだ。

栗色の髪につぶらな瞳。まさに純朴な少年そのものだ。だがその腹には凶悪な獣を飼っている。

「つまんないなあ。強面こわもての男たちに取り囲まれて悲鳴とか上げないの？  
ヴェルナー」

「あいにくとそういった連中は騎士団で見慣れているのでな」

「じゃあ襲いかかられても怖くないね」

パトリックの言葉を皮切りに、男たちの手が一斉に伸びてきた。

（結局こうなるか……！）

最低限の動作で拳をかわし、腰に差した剣の鞘を旋回させた。

またたく間に彼らの足を鞘で容赦なく叩き、尻餅をつかせる。それでもまだ諦めない男がいた。

「うおお——ッ」

自分より一回り大きい巨漢の肉体から渾身の拳が繰り出される。

ぶうん、と異様な唸りが響いたが、ヴェルナーは意にも介さなかつた。

繰り出された拳をみごとにかわし、太い腕に手を添える。そのまま巨漢の腕をひねり上げた。

「ぐ……うう……ッ」

男は必死に激痛に耐えようとするが、見る見るうちに顔から赤みが消え、青白い形相へと変わっていく。敬愛する人物の前で醜態はさらせない、ということか。

ヴェルナーは眉をしかめて、パトリックに叫んだ。

「パトリック、私は聖都で暮らす人間の腕を折りたくはない！ 例え騎士団と反目しあう人間であつてもだ」

だからさっさと退かせろ。

言外に訴えると、パトリックはテーブルの上で頬杖をついた。

「相変わらず聖騎士様は優しいね。掃きだめで生きてきた者もちゃんと聖都で暮らす人間だつて言ってくれる。なあお前ら、彼は俺の客だ。ひけ」

「ですがっ」

するとパトリックはすう、と目を細めた。

彼のなかの獣が姿を現す。

「もう一度言う。俺の客だ。ちよっかいをかけるのも、呼び捨てにしていいかも俺が決める」

店内が水を打ったように静まりかえった。

彼の逆鱗にわざわざ触れようとする者など、この店にはいない。

パトリックが姿隠しのマントを背もたれに預けて、椅子から降りる。

腕をひねり上げていた男からもう抵抗する意思はなくなっていた。

ほっとひと息つきながら立ち上がると、パトリックが素早く耳打ちし

てきた。

「本当は俺がとめても、とめなくても腕を折るつもりだっただろ？」

「お前は部下をとめる理性を持つ男だろう？」

即座に返すと、なにが嬉しいのかパトリックは顔をしわくちやにしながら満面の笑みを浮かべた。

実際、そのくらしいの冷静さを持ち合わせていなければ裏社会の顔役はつとまらない。

それを指摘しただけなのだが、彼には違う意味に受け取られたらしかつた。

「ほんとと君って天性の人たらしだよな。やっぱり欲しいなあ。俺のモノにならない？」

パトリックのひと言にざわめきが走った。

(またか……)

五年前の事件以来、こうして事ある毎に誘ってくる。聖騎士の任務を投げ出すつもりはないと言っているのに、まだ諦めてくれないらしい。冗談もほどほどにしてくれ。

顔に出ていたのだろう。またパトリックが嬉しそうに笑う。

店を出ようとすると、彼の配下が恨めしそうに自分を見てきた。おそろく彼らにとって崇拜するパトリックに誘われるということは夢のよ

うなできごとなのだろう。

こちらは全く嬉しくないが――

そうして店の前にいつの間にか用意されていた馬車に乗り込み、本来の交渉場所へと向かった。

「人払いは済ませてある。本題に入ろうじゃないか」

開口一番、パトリックはふかふかのソファに腰を下ろしてそう言った。実に趣味のいい部屋だった。

金はうなるほど持っているだろうに、成金趣味のごてごてとした調度品は一切ない。シックな色合いに統一された空間は天井からつるされた曇りガラスのランプにより鬱金色うこんに染め上げられていた。

正方形の部屋は広さ十メートルはある。部屋の中には見るからに柔らかい長ソファが二つに、聖都でもあまり見かけないガラス張りのローテーブルが置かれていた。

(枢機卿閣下でも持っているかどうか……)

象牙色の壁には彼が狩りで仕留めたであろう大鹿や狼の頭が飾られていた。獣の首にぶさいくな傷跡は一切残っていない。

彼が優秀な狩人という証明でもあった。

そして足の甲までやわらかく包み込む毛足の長い絨毯は踏みしめるだけで一級品と分かる。

突然約束を取り付けてきた男を通す部屋にはあまりに上等だった。「我が父祖の辺獄とは因縁浅からぬ仲の聖騎士様がわざわざ僕を指名してきた。もてなすのは主人の務めだろう」

よく言う。

会合を開くたび、暴動をちらつかせてこちらを翻弄してきたくせに。だが今夜ばかりは彼にお願いする立場だ。対等な交渉は望めない。

「今年、法王庁で恩赦が行われることは知っているか？」

すう、とパトリックの目が細められた。

まるで狐の目だ。こちらの意図を注意深く探ろうとしてくる。

「そこにお前の幹部を加える話が上がっている。もしも法王猊下の恩赦の対象となれば、投獄の年数を短くできるし、そちらとの対立も少しは和らぐと思っただが、どうかな」

恩赦の候補者を上げるのは、聖都の治安維持に携わる聖騎士団の役目だ。そこに横槍を入れられる者はいない。

たとえオブライエンと言えど、この選定に口出しすることはできない。それに五年前の事件でパトリックが差し出した人間はどれも長年彼に仕えてきた腹心だ。彼らの刑期が少しでも短くなるなら、絶対にこの男は乗ってくるだろう。

その自信があった。

だがパトリックは数秒経っても無言のままだった。こちらが出した餌に食いつきもしない。

いやもつと有利な条件を引き出すための沈黙なのかもしれない。

なにせこの男は百歳をゆうに越える怪物なのだから。

たっぷりの沈黙のあとパトリックは口をひらいた。

「なあ団長殿。交渉には代償がつきものだよな。俺があんたにそこまでしてもらったら、あんたに見返りを渡さないといけない。あんたは一体何を望むんだ？」

「金、かな……。この数年、私の領地も不作でね。領民が飢えないようにするのは領主たるものの務めだろう」

この男にわざわざこちらの弱みを見せる必要はない。

「いくらかな？」

食いついた！

喜びを押し隠し、申し訳なさを装ったまま告げる。

「白金貨を百枚ほどもらえたら助かる」

「悪くない取引きだ。けど一つ気になるのは自分の領地の不作をまかなうために、どうしてあの莫大な富を持つ妻のご実家を頼らないのか、俺はとても気になるな。それに今日は法王庁内の予算配分が財務評議会で決定され、その報告が各部署で伝えられる日だ。俺の耳では、新しい議長殿とあんたはもの、凄、い不仲だって聞いたぞ。なんでもその昔、あんたの妻を巡って争い合った恋敵だそうじゃないか。そんな人間が予算の決定権を握ったら、復讐を選ぶと思うんだ。例えば騎士団の予算削減……とか」

顔に出すような真似はしなかった。

もともと分かっていたことだ。この男ならそこまで調べ上げてくるかもしれないと——

ここで素直に驚いてしまったら奴の術中にはまる。一気に対等な交渉ではなくなり、奴の言いなりになるしかない。

乗るな。

絶対に奴の手札に食いつくな。

「——もしもそれが事実なら法王猊下の『人を見る目』が曇っていた、ということになるな」

暗に、法王をおとし貶める言葉につながるぞ、と言えばパトリックは愉快そうに微笑んだ。

この顔が嫌いだ。

純真無垢な顔を気取りながら内心、人を騙し、貶め、屈服させることを狙っている。この男とは死んでも反りが合わないと実感させられる。

「法王様がお座りになる金ぴかの玉座の前で言ったらそうかもしれないが、ここは俺の屋敷だ。証人はひとりもない！ 正直に言えよ。俺の金が欲しくて来たんだってさ。ヴェルナー」

「……交渉は決裂と捉えて良さそうだな」  
ソファからすつくと立ち上がった。

譲歩できるのはここまでだ。これ以上こいつに縋れば、骨までしゃぶられる結果となる。

踵を返そうとすると、パトリックの声が追いかけてくる。

「白金貨三百枚、支払うと言ったら？」

それは向こう三年オブライエンの意地悪い復讐に耐えられる金額だっ

た。

そして三年もあればオブライエンを議長から失脚させるのに十分な時間でもあった。

だがこの金額に見合うものと言えば――

「貴様の幹部の釈放を願ひ出ると？」

「まさか」

パトリックがテーブルを乗り越えて、人さし指でソファに座るよう命じてくる。不承不承座り直せば、彼がテーブルをまたいで、指を伸ばしてきた。

とん、と胸を指さされる。

「あんたが俺のものになるなら三百枚出す。五年前の会合から言ってるじゃないか。俺の腹心にならないかって」

「断る」

「つれないなあ。でも奥さまは知ってるのかな。昔の恋敵のせいであんたが法王庁内でいじめられてるって。噂じゃとても心優しいご夫人だと聞く。きつと悔やむんじゃないかな」

「……貴様……ッ」

「それに奥さまの両親も一人娘を預けた男がこんな甲斐性のない男だと知ったら、きつと失望するよな。なんたって自分のせいで起きた問題も解決できず、妻の実家を頼る程度の男だ。さぞや落胆するだろう。結婚を許した時は、きつと法王の覚えもめでたい聖騎士様だったから最愛の娘を預けようと思ったのに」

「黙れ！」

「なら俺にあんたをよこせよ。そうしたら全部解決してやる」

「……ッ」

その提案は喉から手が出るほど欲しい。だがその代わりに自分は何を失う？

今まで聖騎士となるために築き上げた時間、聖都の守護者として戦ってきた誇り、なによりも聖騎士となったあの日——法王猊下に剣で肩を叩かれた日に誓ったのだ。

この方の剣となり、盾となると——

生涯をかけた誓いをこんな形で破り捨てるなどあつてはならない。

冷静になれ。

これは悪魔だ。まごう事なき悪魔の形をした生きものだ。決して屈してはならない。

「——金で私を手に入れて貴様は納得するのか？」

その問いかけは恐ろしいほど相手に劇的な効果をもたらしただ。

見る見るうちにパトリックの顔から笑みが消える。

裏社会でここまで登り詰めるのに、小人族である彼は幾度となく苦澁を吞まされてきたはずだ。そんな男が己の腹心を金で買うことに我慢できるか？

いいや。絶対に我慢できるはずがない。

金で買われたと知られたら、この誇り高い男は決して自分を許せなくなるだろう。今まで知謀と策略でのし上がってきたというのに、最後に取れた行動が金。

他の手下は納得したとしても、この男の心が納得しない。できない。

なんびとにも慣れぬ悍馬かんばとして生きてきた男だ。最もお気に入り腹心を金で買ったと思われることは、パトリックにとって生涯最大の屈辱

となるだろう。

「いいね。あんたのそういうところ、大好きだ」

凶悪な笑みが浮かぶ。文字通り彼の逆鱗にふれたらしい。

だが知ったことか。

「私は貴様が嫌いだ」

これで分かったはずだ。互いに決して相容れない存在だと――

なのにパトリックは栗毛の前髪を指にくるくると巻き付けて嗤わらった。

「金も払う。なおかつ俺に惚れさせる。そうしたら問題ないだろうか？」

「どうやって？」

この男に自分が惚れる要素などどこにもない。確かにその知略と胆の太さは見事だが、惚れこむ価値などどこにもない。

法王に仕える聖職者が悪人に惚れる道理などない。

そう思った瞬間、思考がねじれた。

「——あ……………」

数秒前まで奴を嫌いだと正常に考えられていた脳が思考をはねつける。お前の惚れた人間はただ一人パトリックだけだと身体に植え付けてくる。一生賭けて愛すると誓った妻の姿が黒く塗りつぶされてパトリックの姿に上書きされていく。この男になら何をされてもいい。

抱かれたっていい。

そんないびつな考えに身体が塗り替えられていく。

床に立っていられず、ソファに倒れ込んだ。

「——きさま……………何を……………した……………」

「ちよつと魔法をかけてみたんだよ。君が強情なのは知ってたからさ。ほら君の敬愛する人間は誰かな。ヴェルナー」

唇が勝手に動いてしまう。

そんな方は法王陛下以外にいないと考えようとするも出てきた言葉は真逆だった。

「パトリック……ッ」

「いいねえ。実にいい。じゃあ君の愛してやまない人間は？」

妻のカーラだ。彼女以外にいるはずない。

それなのに出てきた言葉はまたしても――

「お前だ。パトリック」

嫌だ、嫌だ、嫌だ。

私が愛してやまない人はただひとり妻のカーラだけだ。彼女以外に誰も存在しない。

だというのに唇はひとりでに奴の名前をつむぐ。

「じゃあ俺にもちろん愛されたいよな？」

こいつに抱かれるなんて冗談じゃない。吐き気がする。

同じ男として能力は認めていても、肌を重ねる気など微塵もない。だが不思議と魔法を受けた身体は、こくりと頷いてしまっていた。

その交わりはすぐに始まった。

広い応接間で二人きり、ソファに陣取るパトリックの前にしゃがみこみ、彼のズボンを下ろす。

他人の、しかも同じ男のベルトを抜くなど初めての経験でまごついた。その動きのノロさすら奴は楽しんでいた。

「本当に経験がないんだね。君。意外」

「……すこし黙っててくれないか」

聖騎士である自分が男のまたぐらの前にしゃがむことすら、初めての経験なのだ。手つきが遅いのは仕方がない。

ようやっと彼のベルトを抜きボタンを外すと、下着が現れた。

紺色の木綿生地で手触りが良い。その中央に隠れているものはこんもりとした山を築いていた。

「……………本当に、その……………するのかわ？」

今更ながら腰が引けてしまう。なにせ外見が少年とはいえ、同じ男のモノを間近でふれるなど初めての経験だ。

「俺に抱かれないんでしょ？」

「……………くッ……………だれが——ッ、はい」

まただ。

逆らおうとすると言葉が霧に包まれて消えてしまう。

「とりあえず扱くくらいはできるでしょ？ 聖騎士様でも」

ぼろん、と下着から出てきた竿は小人族らしいサイズだった。自分の

子どもの頃とさして変わらない。

その事実にはホッとしたのもつかの間、手を取られた。

「ほら、まず親指と人さし指で輪っか作って」

「……………ッ、こうか……………?」

「そうそう」

言われたとおりに指をすべらせると、ムクリと竿が起き上がる。輪っかを上下させるたび、竿が太くなっていく。

(……………ちよつと待て。なんでこんなにおつきく——!?)

パトリックの変化は止まらない。

勃起すると同時にぐんぐん長くなり、立派な太さになっていく。それはもはや自分の竿が子供サイズに見えるほどの大きさだった。

「女の子たちにはすごく好評なんだよ。俺の。うぶな団長さんにはちよ

つと刺激が強かったかな」

笑いを含んだ声には自慢が滲んでいた。

「すこし驚いたただけだ……ッ」

「口答えする君がやっぱり一番可愛いな。この状態で続けようか」  
魔法の効果の程を言っているのだろう。

今も彼の竿を握っているのに、嫌悪感が全くと言って良いほど沸いてこない。むしろ愛おしい気持ちさえ浮かんできてしまう。

(こんな奴のモノがどうして——ッ)

今度こそ手の動きに集中しようと思った瞬間、頭を掴まれた。

ちゅうう♡♡

唇を亀頭にくっつけさせられる。生あたたかい液体が上唇に付着し、甘い香りが鼻をついた。

「——ア、」

「どっちが上の立場か自覚してよね」

その言葉が聞こえると同時に、パトリックのモノを口に啞えこまされた。

顎が外れるほど太い肉棒が口内に入ってくる。

舌で押し出そうとするがうまくいかない。

「ア……………うんっ♡……………」

「もしも噛んだら、俺の部下たちに今夜君を犯させるから」

「ッ  
!!」

あれほど自分を欲しいと言っておきながら、この男はそれをやる。

そういう怖いところがパトリックにはあった。

必死に歯を立てないようにすると、調子に乗ったパトリックが今度は

両手で頭を掴み、腰を振り始めた。

ずちゅ♡ずちゅ♡ずろろろ♡♡ずちゅん !!

裏筋が舌にひっかかる。それが気持ちいいのか、ピストンのスピードが上がる。

(待て！ こんな強引なの……聞いてな——ッ♡)

「俺、根元までしゃぶってもらうの好きなんだよね。ちよつと喉、使わせてもらうね」

次の瞬間、亀頭が喉奥に入ってきた。柔らかく熱い粘膜に亀頭をむりやり飲み込まされ、苦しい。

けれど愛おしさもこみあげてくる。

(い……やだ……っ)

涙が浮かぶと、滲む視界のなかでパトリックがこれみよがしに笑った。

支配者の、雄おすの笑みだ。

「いいね。君の泣き顔ずっと前から拝んでみたかったんだ」

ずろろろろろ♡どちゅん♡♡

激しく出し入れさせられ、自分の喉を玩具のようにあつかわれる。

ぴゅううう、と先走りが喉をつたい落ちていき、彼の竿が更に固くなる。鼻先に栗色の陰毛がかかってこそばゆい。顎に重たい睾丸がぶつかってくる。

「まずは一発目、全部飲んでね」

何が出されるのか分かっていても怖かった。その時がやって来ないことを願うと、パトリックの足先が動いた。

くにゅ♡

股間を少年の足に踏まれる。

「ッ♡♡」

「へえ、聖騎士様もフェラしてると感じるんだ。この盛り上がってるの、君のおちんちんだよね。かわいい」

足の指先で器用に竿を揉まれる。

調子に乗るな！

涙目で睨みつけると、パトリックがぞわりとするような笑みを浮かべ、頭を押さえ付けられた。

ぶちゅう♡♡

一際奥までくわえこまされた瞬間、パトリックの竿が大きく脈動する。

（やっ——来る……ッ♡♡）

頭を掴む手を外そうとしたが、それより早く射精された。

ぶびゅるるるる♡♡

激しい勢いで精液が喉に注がれていく。

何度も何度も。

粘ついた熱い液体が喉にひっかかるも、射精はまだやまない。

(こんな量………飲み切れるはずが——ひっ♡♡)

飲み込めなかった精液が口から漏れて、床にぽたぽたと垂れる。

なまぐさい液体が体内に入るたび、身体の内側から奴に犯されていく気がした。

「あーあこぼしちゃった。団長さんの顔で拭かせてもらおう」

にちゃ………ああ♡

精液のたっぷりかかった竿を頬や額にべっとりつけられ、しまいは唇に精液まみれの亀頭を押し付けられた。

「まだ取れないから団長さんの髪の毛も使わせてもらおうね」

「あ……や……め……。……ッ♡」

耳元の髪を一束つかまれ、それで精液まみれの竿をふかさされる。ねばついた水音が耳からダイレクトに身体に伝わり、下半身が熱くなる。

「へえ。団長さんのズボン、おもらししてる。もしかして俺のチンコくわえさせられて、感じちゃった？」

「なにを馬鹿な……。ッ」

「足でいじられるの、本当は好きなんですよ」

にちちっ♡

ぐねぐねと柔らかい股間を素足でいじられるたび、身体が切ない声を上げる。

「足、動かすのやめなさ——ッ♡」

「あ。四倍も年上の俺に口答えするなんていけない子だなあ。こうなっ

たら団長さんのおちんちん見せてもらわないと」

射精してスッキリしたのか、パトリックがソファから降りてきた。

膝立ちでしゃがんでいた私のズボンを手馴れた動作で脱がす。

「や——待て！ 私にふれるな……ッ」

「もう遅いよ。うわ。下着が黒とかエロいね。人妻っぽい」

「……あッ。違う。これは、そんなんじゃない——」

「もしかして俺の好み知ってた？」

「は……い」

「違う！」

何を言っているんだ。私は。

こんな奴を喜ばせる義理などない。

それにこれは騎士服が白いから透けないように身につけているだけで、

性的な意味など一つもない。

「可愛いこと言ってくれるね。じゃあ、団長さんの大事なところ、ご開帳  
」

絹の黒い下着を強引に引きずり下ろされ、勃起した竿を取り出される。  
「へえ、かわいいサイズ。団長さんのおちんぽ、ちんちくりんなんだ。  
俺のと比べたら子どもサイズじゃん。このこと部下のみんなは知ってる  
の？」

「知ってるわけがない……ッ」

「じゃあ、このサイズだって知ってるの男では俺だけなんだ。ふうん」

「もういいだろう？ ……手を、離せ」

「あのさ。俺に命令できる立場だったっけ？」

「ッ」

また言葉につまる。

身体がもっと彼にふれてほしいと訴えてくる。

理性が強制的に溶かされて彼の手にさわりたい、甘やかされたいと言ひ募ってくる。

「まあ僕も鬼じゃないから、三回抱かせてもらったら君のことを諦めるよ」

「ほ……本当か……?」

たった三回この男に抱かれるだけで、家族を守れるのなら安いものだ。それに――

（私が愛しているのは妻のカーラだけだ。口では奴の名前を言わされても、彼女を愛している事実は変わらない）

黙りこくっていると、パトリックが満足そうな笑みを浮かべた。

「理解が早くて助かる。だいじょうぶ。ちゃんと可愛がってあげるからね」

「いじめるの間違いではないか……ッ」

身体が奴を好きになっても、へらず口を叩く心までは消せない。

「あ。そういうこと言う？　じゃあ本当にいじめちゃおっかな。団長さんのおちんちん」

パトリックがシャツの胸元から小さな試験管を取り出した。透明な管の中でトロトロと何かが動いていた。

（なんだ？　スライムか……？）

彼が栓を抜くと、青い粘性の液体を亀頭にかかった。

「……っ」

「これはうちの娼館で今大流行中の最新型スライム。どんなに細い穴に

でも入り込んでいけちゃうんだ」

「細い穴……?」

嫌な予感がした。

それは見事的中して、スライムはつるりと亀頭の中央から尿道に侵入した。激烈な快感に襲われる。

(あ……何だコレ……ッ……身体の奥から熱く……ッ)

「ふふ。イイでしょ? 媚薬つきで尿道ほじほじしてくれるの。しかも精液が大好物なんだ。団長さんの金玉空っぽになるまで吸い取ってくれるよ」

「……ア、あ、ア………ッ♡っ♡」

「言葉も出せないくらい気持ちいいんだ。良かった。じゃあ、後ろも開発していいっか」

「はっ……、……や……ッ……」

頭の中で言葉をまとめようとするたび、強烈な快感に踏みにじられる。たった一本の小さな触手によって身体を内側から蕩かされていく。さらに細い尿道のなかでスライムがうねるたび、腰が浮いてしまう。

床のカーペットは自分の出した精液でびっしりと濡れていて、本当におもわしめたかのようになっていた。

(い、やだ……コレッ♡ なにも、考えられなくな——ッ♡♡)  
にちゅ♡にちちっ♡ずろろ——ろろ♡♡

イキたくなると射精するより先にスライムに吸われてしまう。射精しなくて精液を作っているのか、それともスライムのために作っているのか分からなくなっていく。

「ひ……あ……やっ♡ パトリック……とめて……ッ♡」

「うわゝ自分から腰振っちゃってる。そんなな気に入ってくれたんだ。俺も嬉しいよ。じゃあもつとスライムに精液じゅぽじゅぽ吸ってもらうために、団長さんの前立腺をこれからいじめちゃいまゝす」

(ぜん、りつせ……ん? ……って、何だ?)

この歳でも妻に一途だったため、性の知識には疎うとい。同僚と下ネタを交わすこともなかったから、その言葉がどこを指すのかも全く分からなかった。

つぶう♡

尻の割れ目の奥——小さな穴に指を入れられる。

「やめ——そこは、きたな——ッ!？」

何かが尻の穴の中をキレイに舐めとっていった。

「ひっ……うう♡ 今の、なにつ♡」

肉厚で生あたたかい、大きな舌が粘膜の細かい肉ひだまで全て、完璧に汚れをしゃぶりとっていく。

「お掃除スライムだよ。気持ちよかったですよ？ もっかい舐めてもらう？ これも案外クセになっちゃう客多いんだよね」

「……あ♡ あ♡ ……っ♡」

初めての体験に性の知識が薄い身体は無防備すぎた。もはや床に四つん這いになるしかない。

そこへパトリックが上から声をかけてくる。

「これから前立腺たっぷりいじってあげるから、存分に啼いてね」

まだ続きがあるのかと思うと鳥肌が立った。

「もお、やめ——」

「だーめ。俺に三回抱かれるって言っただろ？ ほら、団長さんの前立

腺ピクピクしてて可愛いね。つまんじゃお」

ぶにゅ♡♡

柔らかい——体内でぷっくりとふくらんだソレをつまみあげられる。  
つねられ、押し曲げられ、ひっぱられる。

前立腺の形が変わるほど指でいじめぬかれる。

すると今度は体内に入り込んだお掃除スライムに粘膜を嫌というほど  
しゃぶられる。

快感に次ぐ快感によって搾りだされた精液が尿道に入り込んだスライ  
ムによってすぐさま吸い取られ、何度も空イキさせられる。

「ひっ……ッ♡ もお、ムリッ♡ こんな——耐えられな……ッ♡♡  
い——やああああああ♡♡」

女みたいな悲鳴が部屋中に響き渡る。

「いい啼き声♡　どんどんスライムに团长さんの精液ゴクゴクして  
らおうね。それとももうおしまいにする？」

「——する！　して、イイから……ッ♡♡」

もう恥も外聞もなかった。この快樂の坩堝るっぼから抜け出せるのなら何  
でも良かった。

「えー。どうしよっかな。团长さんのおちんちんはまだスライムにいじ  
めて欲しそうだけど？」

「そ……な……こと、ないっ♡　ひッ……クッ……ウ♡　あ♡　ア♡  
やあああ！　吸うな……あ♡」

嬌声を上げながら、カーペットの上で身悶える。

ようやく尻からスライムとパトリックの指が抜かれた。

前立腺の責め苦が終わり、ほんの少しだけ身体が楽になる。

「俺、今日入れる予定なかったんだけど、団長さんが可愛くおねだりするから、団長さんの処女もらっちゃうね」

「……………なにを言っ——」

腰を持ち上げられ、尻の穴に熱い肉棒をくつつけられる。その形には覚えがある。数分前まで口に加えこまされていたパトリックの太竿だ。あれだけの量を射精してすぐ回復するはずがない。だというのに彼の竿は完全に勃起していた。

「……………さて……………今は——」

あれだけ身体をいじめ抜かれたのだ。しかも尿道にはまだあの触手スライムが残っている。それに前立腺をいじられた感触はまだ全身に残っていて、太ももが小刻みに痙攣けいれんしていた。

今、挿れられたら——

「団長さんの初めてもーらいつ」

ず——ぶぶぶッ♡♡♡♡

太く、硬い熱棒が粘膜をいとも簡単に蹂躪し、入ってくる。

「すっげ。中やわやわトロトロじゃん。団長さん、本当に処女？ 実は

他の男にもう抱かれてたりする？」

そんなことあるわけがない。

「ッ！」

キツく睨み返すとパトリックがニヤリと笑い、この反応すら奴の想定内だったと分かる。

「モノホンの処女なんだ。じゃあ今夜、俺のチンコの形覚えて帰ってね」

ず——ろろろろ♡どちゅん♡♡

ものすごくゆっくりと肉棒が出ていったかと思えば、次の瞬間根元まで突き入れられる。

裏筋が前立腺を押し曲げたせいで、アナルがくぱくぱと音を立てて収縮した。

(や……何でこんな、太くて、長い……耐えられな——ッ♡♡)

「うわ。団長さんの前立腺ちょうど俺のイイところに当たる。俺たち身体の相性抜群だね」

そんな相性あってたまるか。

キツくにもうとすると、前立腺ごと引つ張るように引き抜かれ、また裏筋で押しつぶされる。

その快楽の繰り返しで産まれた精液を尿道責めスライムに飲み込まれ、四つん這いすら難しかった。もはや尻を高く突き上げることしかできない

い。

「団長さんも俺のチンコの感想言っつてよ。どう？」

「ア……くうっ……誰が……、……言うかッ」

「またまたそんなこと言っつて。俺が動かさなくても腰振ってるじゃん。気持ちいいんでしょ？ 俺のチンコ」

腰を掴んでいた手が離れると、自ら腰をこすりつけてしまう。

自分の下半身が左右に揺れている。それは貪欲にパトリックの雄を飲み込み、必死に啜え込むメスの動きだった。

(……ア♡ 嘘だ。今のは私の動きなんかじゃ——)

「ほらね。団長さんは男にケツ犯されるのが実は大好きなんだよね」

「ちが——」

「本当はお金の無心じゃなくて、俺に抱かれたくて来たんでしょ？」

「そんなこと……っ♡」

口の奥で、そうだと心が叫んでくる。

彼に骨の髄まで犯されて、しゃぶらりたい。優しく、激しく、彼の身体にまたがって腰を揺らし、心ゆくまで愛されたい。

(や、めろ……私はそんなこと思っていない♡)

「俺のチンコこんなに食いついて離さないのも、実は奥さんと最近セックスできてないからでしょ？」

「あ……彼女の話をするな……ッ♡」

「奥さんも可哀想だよ。旦那が実は男に抱かれるのが好きだったなんて知ったら団長さんを捨てちゃうかも。そうはなりたくないよね？」

口答えならできた。

だが自分の身体の反応が全て裏切っていた。パトリックの言う通り自

分は無様で、だらしない、彼女の夫となるにはあまりに墮落しきったメ  
スだと示していた。

「ねえ、俺に抱かれるの好き？」

「っ♡♡♡」

答えるまでに長い時間を要した。

出せる答えはもう決められている。

けれどそれを口に出すのは屈辱だった。

「ねえ」

四つん這いの身体に後ろからしがみつくとパトリックに耳打ちされた。

さっさと墮ちたと宣言しろと迫られる。

その脅迫すら、今の身体は悦楽として受け取っていた。

(嫌だ。こんなのだ……っ♡ 誰か……助け——)

思考がまたねじれていく。黒く塗りつぶされて、彼のことを考えるだけで胸がときめく。

(私は……こんなことで……負けたり、しな——ッ)

「——好き……っ♡」

気づくと彼に告白していた。尻を彼の股間にくっつけて腰を揺らしている。

に——ちゅうううう♡♡♡

これでもかと彼の肉棒を吸い上げて、チンコの形を必死に覚え込もうとしていく。

次から次へと涙がこぼれた。

そこへ、体内の肉棒が猛り狂った。

「……っ……や、なんで……、……ッ♡」

「悪い。今のでフル勃起しちゃった。これから本気で犯すね」

ずぶんっ♡♡

さつきよりも一層激しく腰を振られ、凄まじい速度で出し入れされる。前立腺をががつとしゃぶりつくようにいじめられ、ぷっくりとふくらんだ亀頭で腹の奥をえぐられる。

何度もしつこく。

応接間に結合部から漏れだした音が盛大に響きわたり、自分が今一匹の雄に犯されていることを実感させられた。

「やああああ♡ ……ッ♡ ……はげしっ ……抜けっ♡ ……抜いてくれ ……ッ♡」

「無理でしょ。あんなカワイイおねだりされたら朝まで抱くに決まってるんだろ。オラッ」

どちゅん♡どちゅん♡どちゅどちゅどちゅん♡♡

腰にひつつかれ凶暴な雄に何度も身体を貫かれる。すると尿道をほじっていたスライムが主人の意図を見抜いたのか、細い尿道の中で膨らみ出す。小さなイボイボに尿道をいじめぬかれて、また空イキする。

「いいね。メスイキすると、俺のチンコにピッタリ吸い付くとこ超かわいい。このまま俺の精液全部飲み込もうな」

「ひッ♡ ……もお……、やめ……やめろおお♡♡」

一際高い声を上げた瞬間、パトリックの肉竿が大きく脈動し、体内に精液をぶちまけた。

ぐびゅるるるる♡♡

粘膜に熱い液体をかけられ、敏感な肉ひだがまた彼の竿を締め付けてしまう。それが気持ちいいのか、押し込んだ竿をグリグリと回され、前

立腺がひねくり回される。

ぴゅくく♡♡

体内で愛くるしい音を立てさせられ、またイカされた。

そのままパトリックの射精は数秒続き、ようやくと抜かれた竿は精液まみれだった。

「あー気持ちよすぎて、アレ出そう。ちょっと、借りるね。ヴェルナーのケツ」

「ハアツ♡ ……ハアツ♡ な、にを……？」

カーペットに精液をまきちらしながら、再びパトリックの竿が入ってくる。先程のような硬さはなかったが、完全に萎えてるわけでもない。

一体なにを？

疑問に思った瞬間、それは流された。

チヨロロロロロ♡♡

精液とは明らかに違う性質の液体——おしっこだ。

それが自分の体内をさらに辱めようと垂れ流されていた。

「ア……ひっ♡ やっ……どこに出して……っ♡」

「団長さんのアナル。あれだけ俺のチンコによりまぐってたんだから。それにこれで俺のチンコの形完全に覚えたでしょ？」

「そういう問題では……な……ア♡」

こんな風に扱われることまで許した覚えはない。

「あースッキリした」

完全に一人満足した状態で肉竿が抜かれると、尻から嫌でも奴の出したおしっこと精液が漏れだす。

「あ……っ♡ や……、……っ♡」

重力に逆らえず垂れ落ちてくる液体に羞恥心を煽られ、もはやパトリックを睨みつける力もない。

美しかったカーペットは盛大に自分たちの出した体液にまみれていて、ひどい有り様だった。

「お風呂貸してあげるね」

すっきりした顔で告げられた言葉に涙目で睨み返す。

「あ……当たり前だ」

こんな格好で屋敷に戻れるはずもない。騎士団の詰所にだって戻れやしない。

今更ながらに相談する相手を間違えたとヴェルナーは実感した。

## 幕間

パトリックは法王庁のとある一室で鼻歌を口ずさみながら、書類を片付けていた。

「ご機嫌ですな」

顔を上げると財務評議会議長ことオブライエンが不審そうにこちらを見ってくる。

片眼鏡をかけた痩せぎすの男は正に役人という言葉が似合う。若かりし頃、ヴェルナーと女を取りあったような獰猛さは全く見えない。

「まあね。吉報というのは思いも掛けない時にやってくるものだろう？」  
「言い得て妙ですな」

オブライエンも積年の恨みつもる相手にようやく復讐を果たせたことに満足しているらしく、いつもより柔らかい雰囲気醸しだしていた。決裁し終えた書類を銀の台車にどんどん載せていく。

『ここ』では見慣れた光景だ。

「しかし本当に騎士団の件、良かったのですか？」

「試練というものは時に人を強くさせる。必要な措置だよ。それにかの騎士団長の細君のご実家は裕福だ。彼ならうまく乗り切れるはずさ」  
ぴくり、とオブライエンの頬がひきつる。

相変わらず顔に出る男だ。これがヴェルナーなら微塵も表に出さないだろう。

「あの男がすなおに妻を頼るとは思えませんか？」

「では他の活路を見いだしたのかもしれないね。彼は優秀だから」

「あなたのお気に入りとはいっていましたが、自ら鞭を打つ御仁とは知りませんでした」

嫌味のつもりか。だが底が浅い。オブライエンという男の器が透けて見えるというものだ。

「私にお気に入りに入りなどいいないよ。みな愛すべき人々だ」  
表情を絹のベールで隠したまま微笑む。

「いいでしょう。まあ、私もいつまでも奴に嫉妬深い男だと思われるのも心外です」

「とうとうと？」

「そろそろ結婚しますので」

それは困る。もしヴェルナーがその情報を知ったら訝いぶかしむだろう。これから結婚しようという男が今さら過去の因縁を持ち出して嫌がら

せしてくるだろうか。

聡い彼のことだ。今回の件に何か裏があると考えるに違いない。

それでは今後に支障をきたす。

「その情報、あと一ヶ月くらい伏せておいてもらえないかな」

「できなくはありませんが、貸し一つですな」

「貸しなんて無いだろう？ それとも私に貸し付けられるほど君の後

ろ盾は盤石ばんじやくだったかな」

この男は腹心などではなく、利用すべき駒だ。

駒は駒であることを自覚しておいてもらわないと。

決して盤上で采配を振るう指し手ではない、と――

「そう、記憶していますが」

「では私の記憶違いかな。オブライエン議長は五年前の事件に絡んでい

たことを法王庁で表沙汰にしたいようだ」

部屋に緊張が走った。

オブライエンの口許が大きくひきつる。

ヴェルナーに女の取り合いで負けたこの男はかつて薬と酒に溺れた。

結果、法王庁を追われるはめになりかけたが、すんでのところ拾い上げた。実行したのはパトリックだ。

いや、この場合はパトリックのもう一つの『顔』というべきか。

自然とオブライエンが押し黙った。

どうやら己の立場を理解してくれたようだ。

「いいえ、そんなことは。失礼いたしました」

退出しようとするオブライエンの背中にしっかりと釘をさしておく。

「そうそう。五年前以外のことも査察官から話は聞いているから、その

つもりで、ね」

振り返ったオブライエンの顔は凍り付いていた。

この程度で俺を利用できると思う方が浅はかなのだ。

(ヴェルナーの方がよほど楽しめる)

パトリックはオブライエンへの興味をなくし、窓に目を向けた。

法王庁内で最も大きな窓を持つ部屋だ。天井まで届くほどの大ガラスの向こうには聖都を一望できるバルコニーが広がっている。

その奥には聖なる山ガララトの青い稜線がうつすらと見えていた。

美しくなだらかな山並みを見ると、ようやく抱けた彼の身体のかたちを思い出す。

柔らかい尻に、鍛え上げられた胸筋、さらには厚いくせに触るとふくよかな胸。

(今度は職場に押しかけようかな……)

騎士団の団長室を訪ねたら、きっと彼は仰天するに違いない。ぎょうてん

パトリックのもう一つの顔は誰も知らない。

法王庁での『仕事』は常に顔にベールをかけ、声も魔道具で変えているため、気づきようがない。

ただ一度だけ『彼』が以前口にしたあの言葉――

『君の苛烈さは、私の仕えるお方に似ている』

今も頭にこびりついて離れない。

あの時自分の正体を見破られたのかと思っただが、彼が褒め言葉として使っていることに後から気がついた。

本能で嗅ぎつけたのか。その忠犬じみた嗅覚の鋭さに驚嘆させられた。今までパトリックの擬態は完璧だったからだ。誰にも知られたことはな

い。

だからこそ彼に自分の正体を教えてみたいとも思った。

その時彼はどんな顔を浮かべるのか。

驚きか嫌悪か、それとも喜びか。

おのが破滅を招く行動だと知っていても、とめられない。だから今回はじめて直接的な行動に出た。

もう一つの『顔』では絶対に彼を手に入れられないからだ。

それゆえ彼にこれほど固執してしまうのかもしれない。

パトリックは人知れずため息をついた。

最悪な夜だった。

今まで生きてきた中でこれほど辛く、苦しいひと時はなかった。嵐のなか治安警備に当たった夜の方がまだマシだ。

あのあと——風呂に入ったあとでもパトリックのお遊びに付き合わされ、足腰が立たなくなるまで犯された。

早朝、妻の待つ屋敷に帰るはずが、ベッドから起きだせず、御満悦な奴に介抱してもらうハメになった。

自分を心ゆくまで堪能した男は、予想よりもかいがいしい世話焼きぶり、しまいには朝食をあーんと食べさせようとしてきた。

丁重に断つたが。

これなら彼女に事実を打ち明け、義父を頼っていた方が百倍もマシだった。

後悔先に立たず、とはよく言ったものだ。

しかも奴は三回抱くと言った。あれでまだ一回目だという。残りの二回がどんなものになるのか、想像するだけで恐ろしい。

結局、屋敷に帰れたのは二日後だった。心配する妻をようやく抱きしめてやると、かつての平穩が戻った気がした。

健やかにねむる二歳の息子の寝顔を見つめると、あの夜のこと嘘のように思えてくる。

こんなに愛おしいものを手放せるわけがない。

ただ一つ心に決めたことは、もし来年もまたオブライエンが嫌がらせ

を仕掛けてきた時には絶対に奴を頼らない。義父に失望されても構わない。家族を頼ろう。

ヴェルナーは固く心に誓った。

幸い、あの日からパトリックが接触してくることはなく、平穩無事な日々を過ごしている。

今日は練兵場で新入りに訓練をつけたあと、溜まった書類仕事を片付けるため執務室に籠る予定だ。

何事もなければ今夜は妻とふたり水入らずの夕食をとれる。食後は息子とたっぷり遊び、親子で風呂に浸かる。

完璧な一日になるはずだった。

そのノックが聞こえるまでは――

「来ちゃった」

あの悪魔が法王庁のお膝元、騎士団長の執務室の前に平然と立っていた。

どうやって来たのか。

そもそもこの部屋に来るまでかなりの数の衛兵が立っていたはずだ。

彼らは聖都でもはえぬきの精鋭である。この法王庁に入り込んだ侵入者など容赦なくたたき出す——はずだ。

しかし現にパトリックはリラックスした態度で部屋の前にいる。

「やっぱりここの空気ってお堅くて俺の性にあわないや。ヴェルナーも肩こらない？ あんなに大きな雄っぱい下げてたら肩こり凄そうだけど？」

「どうやって侵入した？」

「侵入だなんて人聞きが悪いなあ。ちゃんと許可は取ったよ。君の団と

懇意にしている鍛冶屋のご用命係としてね。あの店、俺も出資してるんだ。だから合法的に入れたよ。団長さんに二回目の『出資』をするために」

二回目という言葉に、あの夜のことを嫌でも思い出してしまふ。

もう止めてくれと泣きながら懇願してもやめてもらえなかつた悪夢の時間。

あれが今夜再び繰り返されるのかと思うと、目眩がした。

家族と過ごそうと思っていた時間があつたという間にパトリックの出現で塗りつぶされる。

「今夜もまたお前の指定する部屋に来いということか？」

パトリックは部屋の主人に断りもなく入室し、執務机の手前にある応接用のソファに座った。そうやって彼が長椅子に座っていると嫌でもあ

の夜と重なる。

きつとそれも計算しているのだろう。こいつはそう言うしたたかな男だ。

「うーんそれも考えたんだけどさ。君の大切な家族とのひと時を邪魔するのにも気が引けるし、」

ソファを小さく軋ませて立ち上がると、パトリックがこちらを見た。頬杖をつく姿は十二、三歳のあどけない少年に見える。

「君の仕事中に済ませてもらおうと思って来たんだ」

悪気なく紡がれた言葉を一笑にふせるものなら、そうしたかった。

けれどこれは契約だ。自分を差し出すと決めたからには、彼に時間や場所の決定権がある。

「——そうすればさっさと帰ると言うことか？」

「疫病神みたいに言わないでよ。これでも君の出資者なんだよ？　それとも俺以外に白金貨を君に払う人物が出てきたのかな」

「そう……ではないが、ここは私の職場だ。貴様と肌を重ねる場所などない」

「本当に？」

「当たり前だ。ここをどこだと思っている。法王庁のお膝元だぞ」

「僕には関係ないよ。それに僕と愛し合ってるあいだ部下に見られなけりゃ問題ないだろう？　例えばこういう密室とか」

パトリックの細い指が旋回し、執務室をぐるりと指さす。

「っ」

今日はこの部屋でやると暗に伝えられ、ぎよっとした。

「……私の……部屋だぞ？」

「君の部屋だからいいんじゃないか。それともまだ異論がある？」  
有無を言わさぬ表情でにっこりと笑う。

それは他人が自分に従うと信じてやまない顔だ。

「——ない」

椅子から立ち上がるとすぐさま窓をカーテンで締め切った。ドアは内側から鍵をかける。すると背後でクスクスと笑う声が聞こえた。

「そんなに俺とのこと秘密にしたい？」

「当たり前だ」

本来はあの夜の会合一回でケリをつけるつもりだった。それがよもや執務室に招くなど想定外もいいところだ。もしもパトリックの正体を知おおごとるものと出くわしたら、大事になりかねない。

聖都を守護する騎士団長が裏社会を牛耳る男と通じていると知られた

ら一大スキャンダルだ。

五年前の事件の比ではない。

「ま。これはこれで雰囲気が出て良いよね。君の秘密の恋人って感じで」  
「言っておくが貴様と恋人になったつもりもないし、今後もなるつもりはない！」

部屋の明かりは壁にかけられたランプだけとなり、昼間なのにすっかり日が落ちた様相となっていた。

相変わらずパトリックは長椅子でふんぞり返り、楽しそうに観察している。

その余裕綽々ぶりが気に食わない。

(さっさと終わらせてやる……)

騎士服を脱ごうとすると止められた。

「恋人の服を脱がすのは男の役目だってね」

「私には妻も息子もいると言ったはずだが？」

ソファの近くまで手招きされて隣に座るよう命じられた。

言われたとおりに腰を下ろすと、パトリックが膝の上に乗る、向かい合った体勢で上着のボタンを外される。

「前は君の雄っぱいをよく拝めなかったと思ひ出してね」

胸——その言葉に体がびくりと反応してしまふ。

昔から胸元だけは他人に見せぬよう生活してきた。人に見せるには少々特殊な出で立ちだからだ。そのせいか騎士として半人前の頃は苦勞した。その形を面白がってからかう奴もいたからだ。

それをこいつに見られるというのは屈辱だった。

「こういうのは下からボタンを外していく方が楽しいよね。一つ、二つ、

みつつと」

「楽しいのは貴様だけだろう……ッ」

「ねえ。おちんちんも見せあった仲なのにどうして緊張してるの？ ヴ  
エルナー」

「緊張などしていな……、……あつ……」

ぷつん、と最後のボタンが外されて胸元があらわになった。

現れたのは陥没した乳首だった。

「へえ。団長さんの雄っぱいはこんなに厚みがあって男らしい形をして  
るのに、乳首は陥没してるんだ」

乳輪の奥にうもれた乳首を奴の指がほじり出そうとしてくる。

「ッ♡」

「しかもすっごく敏感。もしかしてオナニーする時自分で胸を慰めたり

してる？」

「そ……んなこと、誰がするかッ」

「ふーん、じゃあ元々敏感なんだ。これは開発のしがいがありそう」  
鍛え上げられた胸筋がパトリックの指で持ち上げられ、たぶたと揺れる。

細く小さな指が胸に埋もれるほどくい込まれる。その形を堪能するかのようパトリックが胸の谷間に顔をうずめた。

まるで母親に乳をせがむ赤ちゃんのようだ。

こんな男を産んだ覚えも、育てた覚えもないが。

「じゃあ今日は職場で団長さんの陥没乳首いじり倒してあげるね」

「っっ」

パトリックが左胸に吸い付いた。

ちゅうううう♡

音を立てて乳輪ごと吸われる。そのまま埋もれた乳首をほじり出そうと舌を伸ばしてくる。

「そ……な……ことで……出るわけが……ッ……あ……」

「さっそく感じてるくせに何言ってるの？」

ぴちゃあ♡

あつという間に乳輪が唾液まみれとなり、右胸も指でいじくられる。

「朝に訓練したのかな？ 前よりもヴェルナーの匂いがムンムンする」

クンクンと鼻を動かし、汗をかいた体の匂いを嗅がれる。

「——ッ♡ この、変態がッ」

「えー俺だけじゃないよ。ヴェルナーだって心臓どくどく鳴らしてる。

俺に雄っぱいいじられるの嬉しいんだよね？」

つぶん♡

唾液で濡れた指が右の乳首をほじくり出そうとする。

「そ、……ンなこと……ないっ」

「ほら俺のチンコ固くなってきてるの分かる？」

へそ下にふくらんだ股間を押し付けられ、あの夜を思い出す。何度も乱暴に女みたいに抱かれた夜を――

「フフ。ヴェルナーの股間もおつきくなってるね。そんなに僕に犯されるの期待してるんだ？」

パトリックが身体を密着させてくる。へその下にはちきれんばかりの性器を押し付けられて、身体が勝手にその太さや硬さ、激しさを思い出して反応してしまう。

「いま恥ずかしがり屋の乳首お外に出してあげるからね」

ちゅぱ♡ちゅぱ♡ちゅぱ♡ぢゅううう♡♡♡

初めはおとなしかった吸い付きがあつという間に激しくなり、乳輪を引っ張るほど強く吸われる。

「やだ……や……ッ♡」

「我慢できないからもう俺のチンコも出すね」

ズボンからまろび出た肉棒が敏感な腹部に当たる。浅いへそ穴に亀頭がこれでもかと吸い付く。

「今日はヴェルナーの仕事部屋でたくさん可愛がってあげるね」  
言うなり指で乳輪をつままれる。長く肉厚な舌が穴をほじってはしゃぶりつく。

まるで男なのに授乳をさせられている気分だ。

(こんな……デカイ子ども……持った覚えは——ッ♡)